

令和7年度 学校経営計画報告書

八王子市立片倉台小学校
校長 柴沼 裕行

学校教育目標 心も体も健康な子（元気）		すすんで助け合う子（思いやり）	○よく考えて実行する子（学び）	○は本年度重点目標
基 本 方 針	中 期 目 標	今 年 度 の 重 点 目 標	具 体 的 な 方 策	成 果 の 検 証
安心して生活でき、 一人一人が居場所の ある学校	生活指導を充実させる。	いじめを見逃さない学級経営を行う。 規範意識を高める。傍観者の態度を取らせない。	いじめ対策委員会を通じて、いじめの早期発見早期解決に努める。 清掃活動や奉仕活動を中心に思いやりの気持ちを育む。	・年間3回のいじめアンケート（友だちアンケート）により把握したいじめ事案については、管理職や担任を始め生活指導・いじめ対策委員会での共通理解を図り、組織的な対応に努めた。また、毎週の対策委員会において3回/年のアンケートを中心とした児童の状況について情報共有したが、生活指導との区別が難しい状況が度々見られた。 ・【学校評価アンケート】では、いじめに対する学校の取組に対して肯定的な評価が76%となり前回よりも6%増えた。わからないとの回答が19%あることから、学校全体としてのいじめ防止基本方針の周知や、いじめ防止のねらいを明確にした授業の実践など、学校の取り組みが保護者にも理解されるように情報発信をさらに推進していく。
	教育相談を充実させる。	児童の心に寄り添う。児童の声を聴く。児童が教員から見守られていると実感できるようにする。	巡回相談を活用する。教師と児童の対話を重視し信頼関係の確立を図る。 スクールカウンセラーを積極的に活用する。5年生全員の面接を行う。	・都の巡回心理士による授業観察、相談活動を年間10回実施した。担任へのフィードバック及び保護者への相談活動が充実でき、児童の実態に応じたサポート体制の構築を図ることができた。5月中にSGIによる5年生全員面接を実施。全校実施の「いじめアンケート」も含め、友達関係の把握や児童の心の状況について校内委員会やいじめ対策委員会、職員夕会で随時情報共有することができた。また、SSWとの連携をより一層充実したものとなってきている。
	人権教育を推進する。	自分の人権も他者の人権も守れる児童を育てる。 自他の命を大切に作る児童を育てる。	言葉遣いは心遣いを合い言葉に人権教育を推進し、人権意識を高める。 命を考える日を中心に、自他の生命を尊重する意識を高める。	・【保護者アンケート】では、「いじめ」「生活指導」の学校の取組に対しての肯定的評価は92%に達している。今後も「学校生活のきまり（児童用）」を中心とした学校全体としての共通実践を継続的に行うことで、規範意識を高めるとともに、人権に配慮した指導の徹底を図る。さらに、学年の発達段階に応じた障害理解教育に取り組み、自他の良さを認め、尊重することができる児童を計画的・系統的に育ていることを周知していく。また、福祉教育の視点も取り入れていく。
	食育を推進する。	望ましい食習慣を身に付ける態度を養う。	栄養士を中心に食育の授業を推進する。食物アレルギー対策に努める。	・八王子市の食育基本方針に基づいた食育指導を確実に実施できた。毎日の食に関する給食放送の他、事務室前の食育コーナーの展示の工夫、野菜の皮むき等の体験学習や箸の持ち方の共通指導を通して、食への興味関心の向上と、望ましい食生活習慣の定着に努めた。食物アレルギーへの対応も研修の機会を設けて確実に実施し、アレルギー事故の発生を防ぐことができた。また、各学級で給食の楽しさを実感できるような指導に取り組んでいる。
	防災・安全教育を推進する。	危機回避能力を育てる。	セーフティ教室や体験的活動を行い、総合防災教育を実施する。	・ねらいを明確にした毎月の避難訓練を始め、交通安全教室、セーフティ教室や総合防災教育を計画通り実施することで、学年の発達段階に応じた防災教育や安全教育の充実を図ることができた。また、本校を避難所とする地域の自治会と連携した地域防災訓練をいろいろな想定で実施することで、地域全体の防災・安全意識を高めている。 ・過去の大災害発生日に合わせて、命を守るにはどうしたらよいかを考える機会を設けている。

学ぶ喜び、できる喜びに溢れた学校	「できた」「わかった」による児童の自信と学習満足度を向上させる。	課題解決型授業を推進する。ねらいを明確にした分かりやすい授業、魅力ある課題設定に努める。一人一人の課題を発見し、それを克服する。	多様な考えがもてる授業づくりを行い、自分の課題に応じた活動を自己決定できる力をつけていく。ICT機器を活用して学級全体で共有し、練り上げを行う。意見交換活動を取り入れていく。	・【児童アンケート（5年生以上）】では90%【保護者アンケート】では93%「わかりやすい授業」に対する肯定的評価を得ることができた。また、ICT機器や学習用端末を活用した授業の工夫についても90%の肯定的評価を得ることができた。【全国学力調査(6年)】の結果から、問題解決に向けた自己の取組についての肯定的評価が8割を超え、問題解決型授業の効果を実感している児童が多い。 ・長期休業時の宿題を見直し、「好き」を大切にしながら自身の課題をしっかりと見つけ、解決を図っていけるように取り組んだ。
	基礎的な知識・理解や技能の活用による思考力や判断力を向上させる。	綿密な授業計画を作成する。児童の主体性を育てる。学習規律を確立させる。	週の指導計画、授業改善プランを活用する。本時の評価規準を確認する。単元名や授業のねらいを必ず板書し、学習の見通しをもたせる。「はい、立つ、です」「姿勢・視線」などの授業規律を校内で統一する。	・【八王子市・全国学力調査】では、ほぼ全国・都・市の平均を上回る結果であった。学力層分布によるB層からA層、D層からC層へと分布が移行している傾向が見られる。B層に属する児童を分析すると、あと一歩でA層の区分に入る児童が半数いることから、見直しをするなどしてケアレスミスをなくす指導が必要である。また、D層の児童については他の教科でも同様の結果であり固定化している傾向があるため、習熟度別指導をさらに充実させ、学力の底上げを図っていく必要がある。 ・【学校自己評価より】「ねらいを明確にした授業作り」と「学習規律の確立」ではほぼ達成できたとの回答を得ることができ、定着してきていると判断している。
	学力向上委員会の充実を図る。	学力向上委員会にて学力向上に向けた全校的な取り組みを推進する。	学年での授業交換等教員の能力を生かした指導体制を構築する。ぐんぐんタイム、すきを大切にすることを意識した家庭学習を中心に、課題を含め自ら進んで学ぶという意識を定着させる。	・ほぼすべての教科において学習用端末を活用することができている。また、学力調査の結果から各自が克服すべき課題について、「ミライシード」等を活用した補充問題に取り組むことができた。 ・「ぐんぐんタイム」の継続や「すきを大切に」した家庭学習の取り組み等により、放課後学習や家庭学習の定着が図られ、児童が抵抗感なく取り組むことができていく。さらに機会を増やしていきたい。
自主、自立の精神に満ちた児童の育成	学級の中で児童一人一人が自分の役割を確認し、自尊感情が高まるようにする。	学習面、生活面で一人一人の児童に何のために行うのか、目標を明確にさせる。目標達成に期待を伝え、励まし、良さを認め自己肯定感を高める。	授業時間のみならず、休み時間、給食、清掃、放課後などの児童と触れ合う時間を大事にし、ありのままの姿を認める。子供の小さな変化に気づき、向上心のもてる指導をしていく。	・【全国：意識調査（6年）】では、8割以上の児童が「自分に良いところがある」「認められた経験がある」と回答していることから、自己肯定感を高める教育活動が実践できていると評価している。また、「適切な評価」については、児童・保護者ともに90%近くの肯定的評価を得ている。しかし、10%はわからないとしていることから、一人一人を大切にしたい指導の実践や取組に対する評価規準の明確化など評価の工夫をさらに図っていく。
	特別活動を充実させ、児童一人一人が主体的に判断し活動できるようにする。	学級活動、児童会活動、学校行事などを通し、人に役立つ喜びを味わわせ、自己有用感を高める。周年行事関連の活動を充実させる。	学級での係活動や、委員会活動などで児童の行動を具体的に励まし、自身の意見を表現する意欲とがんばりを評価していく。周年行事を通し、児童、保護者、地域が一体となり愛校心を育む。	・縦割りで構成された活動では、高学年児童が計画・運営の主体となり、栽培活動やたてわり班遊び、集会等の様々な活動をリードする姿が見られ、精神的な成長が感じられた。 ・周年行事では、その意義をしっかりと理解することで、めあてをもって主体的に活動することができた。できるだけ簡素に実施したが、児童の様子や感想から心に残る活動を行うことができた。

家庭・地域社会との協働による開かれた学校 地域運営学校の推進	開かれた学校から、開かれた教育課程を目指す。多様な人々とのつながりを保ちながら学ぶ。「チーム片倉小」の意識をもつ。	保護者、地域と協働し学校の環境整備を行い、安全できれいな学校を目指す。各種ボランティアとの連携を図る。放課後子ども教室の充実を目指す。児童・職員・地域との交流を推進する。	栽培活動や校舎周辺の清掃、および外周の草刈を協力して行う。HPやメール配信等で保護者・地域に対しての情報発信を充実させる。青少年対主催の地域行事に児童、職員がボランティアとして参加する。夏祭り、防災訓練に職員がボランティアとして参加する。	・保護者アンケートによると「学校は信頼できる存在である」との質問に対して有効回答の90%が肯定的な意見であった。昨年度よりも6%上がっており、対応が一定の成果となった。学校運営協議会と地域自治会との連携もできており、一体感のある関係が構築できてきた。 ・地域行事が開催されるようになり教職員の主体的な参加も増えてきたが、参加の仕方・課題も見られた。さらなる充実を目指して学校が積極的に地域の核となれるような活動を工夫していく。
特別支援教育の充実 インクルーシブ教育の推進	配慮を要する児童が混乱なく生活できるようにする。	校内委員会を充実させ、関係者会議を開催する。学校サポーター（支援）の積極的な活用を図る。障がいに関する知識や理解の推進を図る。	特別支援拠点校としての利点を生かし、担任の校内支援を行う。対象児童の適応改善に向け、本校職員、保護者、関係機関（子ども家庭センター、児童相談所、医療機関等）と綿密な連携を図る。	・校内委員会を通して児童の支援体制の共通理解を図るとともに、毎週のいじめ対策委員会を連携させることで、いじめを含めた支援体制と指導の方向性について組織的な対応の強化を図ることができた。 ・都の巡回心理士（10回/年）やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを十分活用することにより、児童理解を深めるとともに、担任や保護者への指導・助言を通してより良い支援につなげることができた。 ・教育相談全体会を複数回開催し、児童の個性に合わせた対応やその変容について共通理解を図ることができた。
特色ある教育活動	小中一貫教育を推進する。	由井第二小学校、由井第三小学校、由井中学校との小中一貫教育を推進する。9年間を見通した連続性のある指導を行う。	小・中学校の教員が、意見交換会を学期に1回行い、指導法や指導計画についての情報を交換し、連携を深める。小・中学校合同で同じ期間にあいさつ運動を実施する。	・学期1回（年間3回）の各校の授業参観・協議会を始めとし、学期初めのあいさつ運動の3校同時開催や地域行事への参画を通して、義務教育9年間で育てる「目指す児童・生徒像」を共有し、地域のつながりを生かした特色ある教育活動を展開することができた。また、はちおうじっ子サミットでの取り組みを通じて課題の共有ができ、解決に向けての取組を行うことができた。連携したキャリア教育に取り組みながら、引き続き小中一貫教育の意義やねらい、取組について情報発信や内容の充実を図りながら、児童や保護者の理解啓発を図っていく。
	異学年交流を推進する。	異学年交流を行い、学年の違う児童同士が助け合い、協力し合い相手を思いやる心を育てる。	児童の発達段階に配慮した縦割り班活動を充実させていく。	・縦割り班活動を年間を通して計画的に実施できた。高学年児童がリーダーシップを発揮し活躍できる場面を意図的に設定することで、自己有用感（頼りにされている）をもたせることができたとともに、低学年児童に高学年児童への感謝の気持ちを抱かせることができた。 ・地域との共同作業である栽培活動を通じて、植物の命を通して他学年との交流が実現で連帯感が生まれ、思いやりと感謝の気持ちが高まった。
防災体制の確立	熊本地震、東日本大震災の教訓をもとに防災体制を確立する。	今後30年以内に70%の確立で起こるとされているM7クラスの直下型地震に備える。	地域と連携した防災教育を通して、防災体制を確認する。 『3.11を忘れない』『地震と安全』を活用する。社会科見学、遠足など、あらゆる場面で対応できるよう計画を立てる。 独自に非常用食料を備蓄する。	・防災安全の年間計画に基づいた避難訓練や全校防災教育を確実に実施した。ねらいを明確にしながら訓練に臨ませるなど、事前、事後の指導の充実を図った。また、学校公開での保護者・地域参加型の体験型防災教育を実施することで、地域全体の防災への意識を高めることができた。また、多くの自然災害の状況を伝える機会を設け、備えるべき具体的な対応についても指導してきた。 ・一昨年度より、各家庭より防災備蓄食を集めて保管する活動を始めた。アレルギー対応だけでなく、保護者への防災対策への意識の向上を図ることにつながっている。